



木原四郎の 水利を歩く in 新川

新潟市在住のイラストレーター木原四郎さんが、西蒲原地域を支える水の流れを訪ね歩き、風景や人とのふれあいを描いていただきました。

新潟市西区の

新川河口排水機場をたずねた。

海水面より低い平地を多くかかえる

ここ西蒲原地域は、排水が悪く

農地の慢性的な湛水被害に加え

大雨のたびに洪水に悩まされてきた。

この悪水を日本海に排水するため

二〇〇年前に新川の開削工事が始まった。

その後の幾度もの拡張・改良の工事を経て、

現在の排水機場の建設により洪水を軽減。

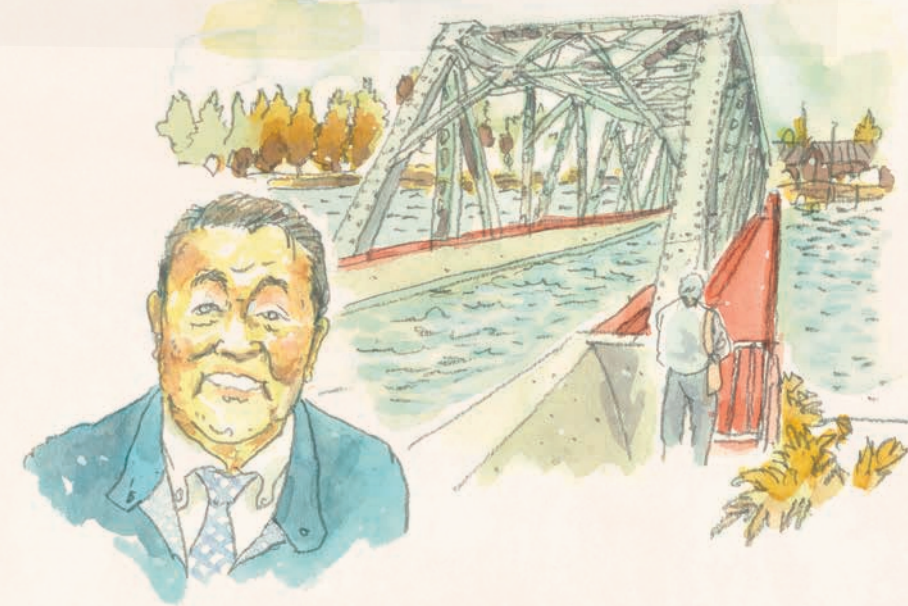
そして、わが国で有数の穀倉地帯に変わった。

茫々たる...

冬空に舞う二羽の力モエに問う。



新潟市西区榎尾の西川水路橋にて
越後新川まちおこしの会会長の
佐藤正人さんに会った。
佐藤さんは地元で生まれ育った。
自然と歴史が共存したまちづくりを
目指し、この会を立ち上げた。現在
新潟市議会議員も務めている。
西川と新川が立体交差する水路橋、
その全景を見ることが出来る日本でも
希有な場所だ。江戸時代末期のその
困難な工事は想像を絶する。
当時の人の力と汗の記録には
頭が下がった。



イラストレーター 木原 四郎さん

1946年、佐賀県佐賀市出身。
「旅するイラストレーター」として
新潟県内を歩き、風景や人物を描き
続ける。独特の柔らかいタッチの
イラストと心温まる文章で人とモノと
の出会いを紹介し、人気を集める。
NHK総合「金よう夜 くらっと新潟」に
出演。各地で展覧会も開催する。



低湿地から豊穡の楽土 地域を支える水利施設

新潟平野の生存基盤を支える農業水利システム。その装置は国内でも希有（けう）な堅牢（けんろう）さを誇っている。とりわけ、日本の穀倉地帯を形成する新潟市、燕市、弥彦村から成る西蒲原地域約2万5千の農地には、8310ヘクタールの農業用排水路が毛細血管のように走り、揚排水機場は実に464機も集中しているのだ。その最大の排水能力を持つのが新川河口排水機場（毎秒240トン）で、排水規模は世界トップクラスにある。

これら排水機場のうち、10機は国営事業によって建造された農業用の排水機場で、稲刈りの終わった今でも休まず、風雪に耐えて稼働している。その訳は、開発前のこの地域一帯が大潟・田潟・鑑潟などの潟が広がる低平地だったからである。海抜ゼロメートル以下の土地が、今も西蒲原地域全体の約2割に達しているのだ。運転を休止すれば、周辺はかつての沼沢地に逆戻りする。

いま、潟湖群跡の水田に立つと、満々と水をたたえた往時の渺茫（びようぼう）たる風景が目に見えてくる。

幕領、長岡藩、村上藩などに分割統治されていた江戸時代、「水苦の地獄」といわれたこの低湿地の開発に挑んだ人々がいた。膨大な工費を投じて砂丘の山を掘り割り、西川に交差させて日本海に通水する新川を開削した人たちだ。

かくして「豊穡の楽土」は成った。その先人の偉業から、200年の歳月が流れる。

13年余をかけて本年度完工する国営新川流域農業水利事業は、老朽化した河口排水機場の大幅改修や隣接地に建て替えられた右岸排水機場などにより、コメ単作から複合型農業への構造転換を大きく加速することになる。

併せて、これらの施設は地域住民の暮らしを守るインフラとしても大きな期待を担うことになる。

幾重もの歴史を礎にして、今日の農業と都市の営みがある。



新潟大学名誉教授
伊藤 忠雄さん

1944年、新発田市生まれ。67年、新潟大学農学部卒。専門は農業経営学。同大教授、副学長などを経て2010年に退職。15年3月まで放送大学新潟学習センター所長。12年から5年間、県内の先進的農業経営者を講師に招き、実践的経営論を議論する「新潟農業経営塾」を主宰。現在、新潟市農業活性化研究センター名誉所長として新潟農業の課題などを問題提起している。





本町そ菜出荷組合
加藤 達男 組合長（燕市）

本町地区のキュウリ栽培の始まりは昭和30年代までさかのぼります。米価が高く減反もない頃、将来、コメだけでは駄目だという意識の下、集落の有志でパイプハウスを建てたのが始まりです。現在は地区の43戸のうち9人が組合に参加。加藤さんは祖父から始まって3世代目、中には4世代目の若手生産者もいます。

「みずみずしく皮が柔らかい」ともたまきゅうりは栽培管理が難しく、品質を保つためお金も手間も掛けている。生産者を増やすと意思統一が難しく品質にばらつきが出る。加藤さん、地域で作り続ける野菜を守るため、決して妥協はしません。

コメ作りの労力低減
ブランド野菜を育む



もとまきゅうり
農



「フオラス」というシステムが導入されました。肥料や除草剤を水に溶かして流せるようになり、労力は以前の半分になった。水管理が楽になり、毎日田んぼに行く必要がなくなったと省力化のメリットを強調します。浮いた時間をもとまきゅうりの栽培に費やすことで、ブランド野菜育成に向けた取り組みを加速させています。

直売所やレストラン
親子が集う憩いの場

そら野テラス
農園



かつて別棟で営業していた直売所とおむすび屋を合体させ、イチゴ狩りに来てくれる家族連れのお客さんたちがゆっくりできる場所をと作られたそら野テラス。同社で生産されたさまざまな品種のコメで握られたおむすびも魅力の一つ

ワイエスアグリブランド
藤田 一雄 代表取締役（新潟市西蒲区）

ワイエスアグリブランドは、「そら野テラス」などを運営する有限会社です。藤田さんの友人が「く」なり、田んぼ3畝を周辺農家3人で引き受けた際、将来、俺たちができなくなったら誰が農業を続けるのか？と考えたのが設立のきっかけです。現在は役員を5人17人で生産と販売を行っています。

「田んぼ53畝で280枚。見て回るだけでも1日で終わらない」というように、受託している田んぼの多くが未整備の上、1区画の面積も小さいです。地域の実情に合わせ水を使うための作業の調整ができません、必ずしも作りたい作型とならないのも悩ましいところ。来年のコメの作付け予定面積は作業受託を含め70畝、大豆を含めると110畝に迫っています。規模拡大にはは場整備が不可欠という半面、地域の合意形成には時間がかかります。今やらないと田んぼが荒れ地になるというのは、頭で



はみんな分かっている。は場整備の先導役になりたい」と意気込んでいます。

一方、直売所やレストランなどを併せ持つ農園「そら野テラス」は、連日多くの人でにぎわっています。周囲には田園風景が広がり、空の広さが自慢です。「親子連れがのんびりと楽しんでほしい」との思いは、着実に成果を上げています。

世界最大級の
ポンプを更新（新川河口）

新潟平野のほぼ中央に位置する西蒲原地域は、弥彦山、角田山を望み、信濃川や中ノ口川、大河津分水に囲まれた水田地帯です。かつては低湿地のため排水が悪く、「三年一作」、つまり3年に1度しか満足な実りがない土地でしたが、1818年に始まった新川開削など、先人たちが数百年にわたり、豊かな実りを夢見て格闘してきました。

戦後の国営土地改良事業などにより、昭和40年代後半までに多くの農業用排水施設が建設され、県内でも有数の穀倉地帯に生まれ変わりました。地域の排水システムは、農地だけでなく、地域の人々の安心安全、暮らしを守るインフラとしての役割も担っています。

排水システムを今後も維持するため、2006年度から18年度までの13年間、「国営新川流域農業水利事業」が行われました。

新川河口排水機場では老朽化した世界最大級の6台のポンプが入れ替えられたほか、建物の耐震補強が施されました。また、新川右岸排水機場は隣接地に建て替えられ、12年度から稼働しています。これらの改修に合わせ、水管理システムを更新し、停電時の電源設備も確保されました。



新川流域農業水利事業の完工式。生産者ら約200人が、地域の農業と暮らしを支える当事業の完了を祝いました

11月9日には、新潟市西蒲区の巻文化会館で事業の完工式が行われました。行政や西蒲原土地改良区の関係者ら約200人が参加し、地域農業のさらなる発展を誓いました。式典では、北陸農政局の奥田透局長が「新川開削から2000年の節目の年に事業が完工したのは感慨深い。整備された農業水利施設を地域の共有財産として維持管理してほしい」と式辞を述べました。

2万畝の受益地はコメの一大産地ですが、地理的表示（GI）保護制度に登録されたささき茶など高品質な農産物が生産され、コメと園芸の複合経営が進んでいます。また、は場整備に伴い地下かんがいシステムを導入することで、タマネギなどの高収益作物の生産も拡大しています。北陸農政局では「国営新川流域二期農業水利事業」（22年度完了予定）を実施しており、新川河口自然排水樋門（ひもん）の改修などを今後、進めていきます。

新川開削200年 排水システムで 農と暮らしを守る

江戸時代には大小多数の潟湖が点在する低湿地だった西蒲原地域。200年前の新川開削に始まり、数世代にもわたる先人の努力と1947年度以降の国営土地改良事業などによって現在の姿に変わりました。そして現在は、担い手確保への新たな取り組みが始まっています。

田んぼに地下排水溝
枝豆の栽培が容易に

枝豆
農

サンファーム大戸
中川 巧 代表理事（弥彦村）

サンファーム大戸は、およそ58畝でコメ、枝豆、イチゴなどを複合栽培しています。一昨年行ったは場整備では、地下60センチパイプの地下排水溝を設置。これに交差させる形で、水はけが良く園芸に転換しやすい「水」の抜けが良くなった。稲刈りが近くなったら表面は乾かし、水は地下だけに



入っても田んぼが傷まず作業効率も上がる」と中川さん。「稲作、園芸とつなげていても有利と力を込

田んぼアート
体感



田植えから
収穫まで
世代を超え
絆深める

田んぼアートの稲刈り（燕市吉田新保地区）

紫や黄色の稲を使って田んぼに絵を描きながら田植えから収穫までともに汗を流し、絆を深める田んぼアート。吉田新保地区で9月30日、稲刈りが行われ、地域の人や親子連れなどおよそ300人が参加しました。同地区では2007年からこの取り組みを継続しており、地域の人が田んぼを提



5色の稲を使って田んぼに描き出し、夏場には田んぼの前にやぐらを組んで上から全体が見わたせるようにしています。「絵柄を考えるのが毎年大変！」と浜田代表

三条市から参加した大野瑞葵さん、倫瑠さん姉妹は「稲刈りをやってみたくかった。茎が太くて切るのが大変」と話し、一生懸命刈った稲を運びます。新潟大学農学部2年の齋藤春奈さんは「子どもたちが生き物を追いかけているのを見るのもうれしいです。ね」と汗をぬぐいました。

